

( 続紙 1 )

|   |   |    |      |
|---|---|----|------|
| 京都大学  | 博士 (人間健康科学)   | 氏名 | 池内香織 |
| 論文題目  | The relation between mindfulness and the fatigue of women with breast cancer: path analysis<br>(乳がんサバイバーにおける倦怠感とマインドフルネスの関連:パス解析) |    |      |
| (論文内容の要旨)   |   |    |      |
| <p>乳がんは女性において最も罹患率が高いがんであり、5年生存率は91%と非常に高く、多くの乳がんサバイバーが長期生存可能になってきている。がん治療終了後のサバイバーの倦怠感の有症率は23~55%と報告されており、療養生活の質の向上のためには倦怠感への対応は重要な課題である。しかし、乳がんサバイバーの倦怠感は症状マネジメントが難しく、ケア方法が十分に確立されていない。近年、マインドフルネスを用いた介入が倦怠感を軽減する可能性が示唆されているが、マインドフルネスが乳がんサバイバーの倦怠感の軽減にどのように関与しているかについては明らかになっていない。倦怠感には不安、抑うつ、痛み、睡眠障害等が関連しているとされているが、マインドフルネスを用いた介入はこれらの症状を改善することが報告されている。そこで、本研究では乳がんサバイバーの倦怠感とマインドフルネスの関係性を明らかにするために、不安、抑うつ、痛み、孤独感、睡眠障害を媒介因子とした仮説モデルを作成し、検証することを目的とした。</p> <p>対象は、がん治療(ホルモン療法を除く)終了後6か月以上経過している通院中の乳がん患者を対象とした。調査は倦怠感、マインドフルネス、不安、抑うつ、痛み、孤独感、睡眠障害、属性を自記式質問紙にて、治療歴と身長を診療録から、Performance Statusを調査依頼時に研究者が直接データ収集した。分析は、対象者の属性は記述統計量を算出し、各因子の関連については相関分析を行った。また、マインドフルネスと倦怠感における直接的および間接的な関係性を調査するために、SPSS version 25.0 及び Amos version 25.0 を用いてパス解析を行った。</p> <p>研究協力に同意した乳がんサバイバー279名のうち、259名から質問紙への回答が得られ、調査項目に無回答の項目があった10名を除外し、249名(59.5±12.4歳、mean±SD)を解析対象とした。</p> <p>倦怠感とマインドフルネス、不安、抑うつ、痛み、孤独感、睡眠障害の各因子の相関はすべて有意な相関関係が認められたため、仮説モデルの因子をすべて残してパス解析を行った結果、最終モデルの適合度はGFI = .993; AGFI = .966; CFI = .999; RMSEA = .016と良好であった。マインドフルネスから倦怠感への標準化総合効果は<math>\beta = -.51</math>、標準化直接効果は<math>\beta = -.26</math>、標準化間接効果は<math>\beta = -.25</math>であった。マインドフルネスは倦怠感へ直接的に影響を及ぼすだけでなく、抑うつ、睡眠障害を經由して間接的に影響を及ぼしていること、また、マインドフルネスは不安を經由し、さらに不安から睡眠障害、孤独感、痛み、抑うつを介して倦怠感へ間接的に影響していることが示された。</p> |   |    |      |

本研究の結果は、乳がんサバイバーの倦怠感とマインドフルネスの関係性を明らかにした初めての報告であり、効果的な倦怠感のケアを考えるために役立つ新しい知見を見出した。マインドフルネスは乳がんサバイバーの倦怠感を直接的に軽減するとともに、不安、抑うつ、睡眠障害を緩和することにより間接的に倦怠感を軽減する関係性が明らかになった。乳がんサバイバーの倦怠感のケアとして、マインドフルネスを高める介入は倦怠感に対する包括的なアプローチとなる可能性が示唆された。ケアを行う際、乳がんサバイバーの倦怠感のみに着目するのではなく、マインドフルネスと倦怠感の関係性において媒介因子となっている症状も含めたアセスメントとアウトカム評価を行う必要性が示唆された。

(続紙 2)

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、乳がんサバイバーの倦怠感とマインドフルネスの関係性を明らかにするために、不安、抑うつ、痛み、孤独感、睡眠障害を媒介因子とした仮説モデルを作成し、検証したものである。対象は、がん治療（ホルモン療法を除く）終了後6か月以上経過している通院中の乳がん患者であり、解析対象は249名であった。倦怠感とマインドフルネス、不安、抑うつ、痛み、孤独感、睡眠障害の各因子の相関はすべて有意な相関関係が認められたため、仮説モデルの因子をすべて残してパス解析を行った結果、最終モデルの適合度はGFI = .993; AGFI = .966; CFI = .999; RMSEA = .016と良好であった。マインドフルネスから倦怠感への標準化総合効果は $\beta = -.51$ 、標準化直接効果は $\beta = -.26$ 、標準化間接効果は $\beta = -.25$ であった。これらの結果から、マインドフルネスは倦怠感に直接影響を及ぼすだけでなく、不安、抑うつ、痛み、孤独感、睡眠障害を介して倦怠感へ影響することが示された。また、乳がんサバイバーの倦怠感にはマインドフルネス、抑うつ、痛み、孤独感、睡眠障害から直接影響を受けていることが示された。本研究は、マインドフルネスは倦怠感に関連する複数因子に対して同時に緩和する作用をもつことを明らかにし、マインドフルネスを高める介入は、倦怠感に関連する因子に単独でそれぞれ介入することよりも、倦怠感に対する効果的なケアとなり得ることが示唆された。

以上の研究は、マインドフルネスが乳がんサバイバーの倦怠感に影響を与えるプロセスの解明に貢献し、乳がんサバイバーの倦怠感に対するケアの開発に寄与するところが多い。したがって、本論文は博士（人間健康科学）の学位論文として価値あるものと認める。なお、本学位授与申請者は、2020年9月17日実施の論文内容とそれに関連した試問を受け、合格と認められたものである。

要旨公表可能日：                      年                      月                      日以降